# 最高に尊敬すべき対象（もの）とは何か！

４次元時空間の中でこれほど安定した情報交換ができている地球人はいよいよ８次元の謎に迫っている。ノルムや積の保存則を満たしなお、非可換(4 元数)、非結合(８元数)の世界こそが宇宙初期のポテンシャルから今の瞬間までを記述した。そして、物質と重力場の等価性のように生命誕生も時間（またはエントロピー増大則）とともに必然である。つまり「物質から生命」は、この宇宙が重力や８元数を選び演算を開始した瞬間に確定してしまった「数学的帰結」であった。

前シーズンで述べた「情報の永続性」は、輪廻転生に通ずることとなり、生命を情報と捉えるなら生死不二(しょうじふに)を数理的に理解できるものとなった。つまり「宇宙へ帰る(安堵(あんど))」とは「我即(そく)宇宙」であり「宇宙即(そく)我」となったのである。

では我々が生きる上で、尊敬すべき最高のもの（対象）は何だろうか？・・・・・・・・それはやはり私は、**宇宙の真理、真実である**と思う。図に表せたらそれを曼荼羅と呼ぶのでしょうか。つまり、将来の物理学における大統一理論と曼荼羅は同じく、宇宙の真理を表現しようとしたものであると思います。そこで私は次のように曼荼羅を直観した。

① 物質から生命を彷彿させるもの。② カオスからフラクタルを連想させるもの。

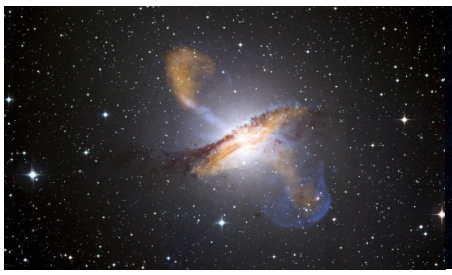
③ 次元収束（畳み込み）が読み取れるもの。④ 森羅万象や生命状態を想像させるもの。

の４つが必要十分であり、そのようなものが本当にあったとしても初見(しょけん)ではおそらく理解したり即座に直観（悟り）はできないと思われる。そこに描かれたものの意味を理解できなければ単なる曼荼羅である。例えば、意思疎通の言語や物や数字や絵や人の名前など、あらゆる物は具体的には何でも良いのだが、ただ絶対間違いなく大宇宙始まりのリズム(ゆらぎ)でありポテンシャルは、我々が法則と呼ぶ名をもつ絶対的なポテンシャルであり、曼荼羅に現わされたなら是非とも意味を理解し、深く直観し（悟り）たいものである。

私が理想とする曼荼羅は、n 次元(有限)線形空間の中にゆらぎによるポテンシャルからノルム空間を彷彿させ、万物から生命状態を直観させるものである。つまりそこに登場するものは具体的には何でも良いのであるが、**意味のあるもの（要素）が意味のある個数でフラクタルな(意味のある)場所に存在しているべきである。**前シーズンでフルウ゛ィッツのノルム空間を私なりに探究したが、意味のある要素の個数は次元数を彷彿させる数である。つまり $n=1, 2, 4, 8, 16, 32, \cdots$ （ $n=2^m$ （$m=0,1,2,3,\cdots\cdots$）） であることが分かる。また、$1+3+7=11$ も大変重要な個数である。・・・・・(以下も当然小説となる。)

ゆらぎによるインフレーションによって始まった数学的帰結はカオスからフラクタルを生み、量の概念を持つノルム空間を作り、$\cdots\cdots, 64, 32, 16, 8, 4$ と次元をより安定したものへと収束させてきた。4 次元時空間は最も安定した空間ではあるが、時間が非可換という「片道切符」である(参照：物質と重力場の等価性)。しかし、安定した 3 次元空間には従属でない 4 つの要素も必要である(参照：「虚点理論」のベクトル空間)。今までのことを**総合してフラクタルな(意味のある)場所に要素の個数を配置すると、次のようになる。**

安定した 3 次元空間は 4 つの要素もしくは力(ちから)の中に生まれる。その中心からゆらぎによるインフレーションが始まり、$1 \Longrightarrow 3 \Longrightarrow 7$ (計11) $\Longrightarrow 15 \Longrightarrow 31 \Longrightarrow \cdots\cdots\cdots$ (4) (8) (16) (32) $\cdots$ (次元) と要素の数が廻(まわ)りに増えていく。またその 1 つ 1 つの要素には意味のある状態が含まれているのである。あくまでも量子重力理論で観測できるもっとも意味のある次元は合計 11 次元のノルム空間であるが、その廻りにも収束してしまった暗黒要素が必ず存在するはずである。



2026. 5. 11　自宅にて

戻る　season 3へ　a second season へ　一覧へ　國吉敏へ